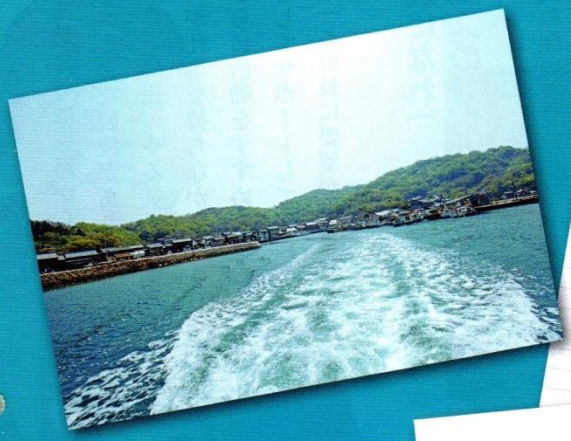
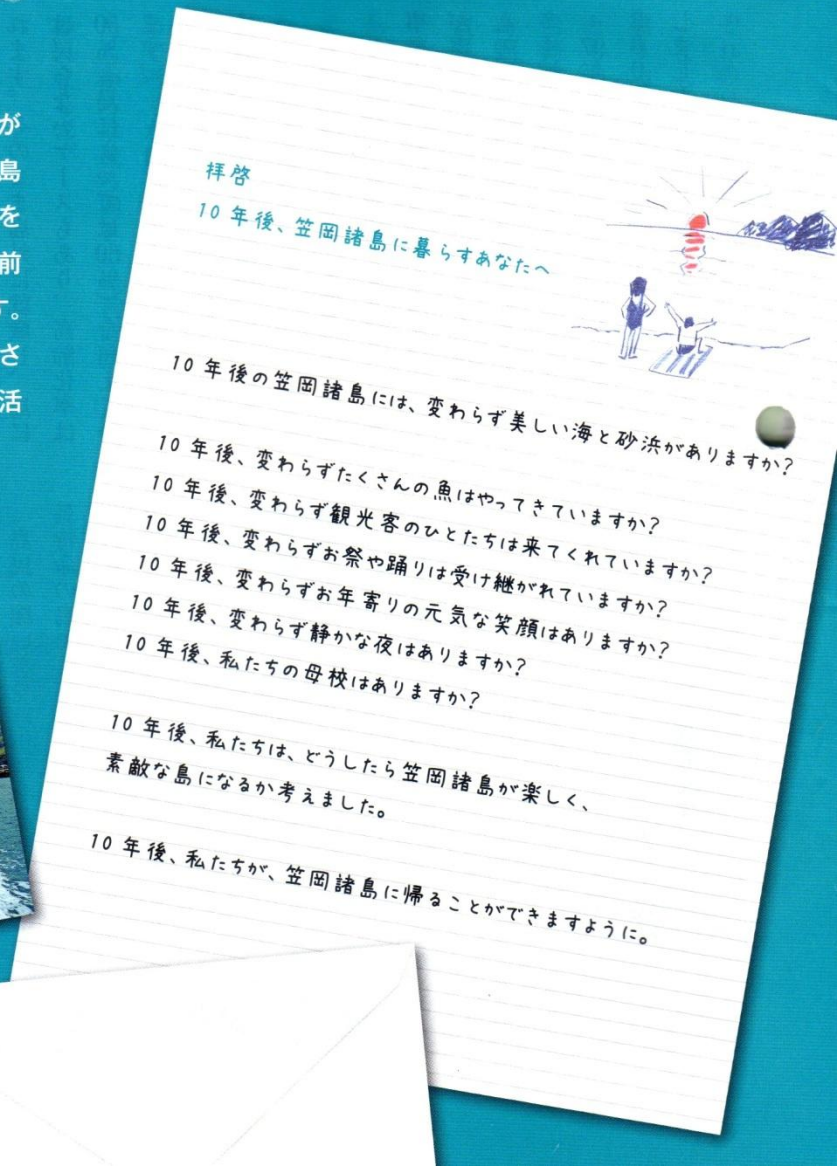
特集

子どもが「帰ってきたい」島をつくろう！

―10年後の笠岡諸島への手紙―

巻頭インタビューに登場した山崎亮氏がかかわったプロジェクト「子ども笠岡諸島振興計画」の現場、笠岡諸島（岡山県）を訪ねました。笠岡諸島では、14年ほど前から島でのまちづくりを実践しています。島づくりに長年かかわってきた守屋基範さん（岡山県・笠岡市建設産業部経済観光活性課統括）にお話をうかがいました。





拝啓

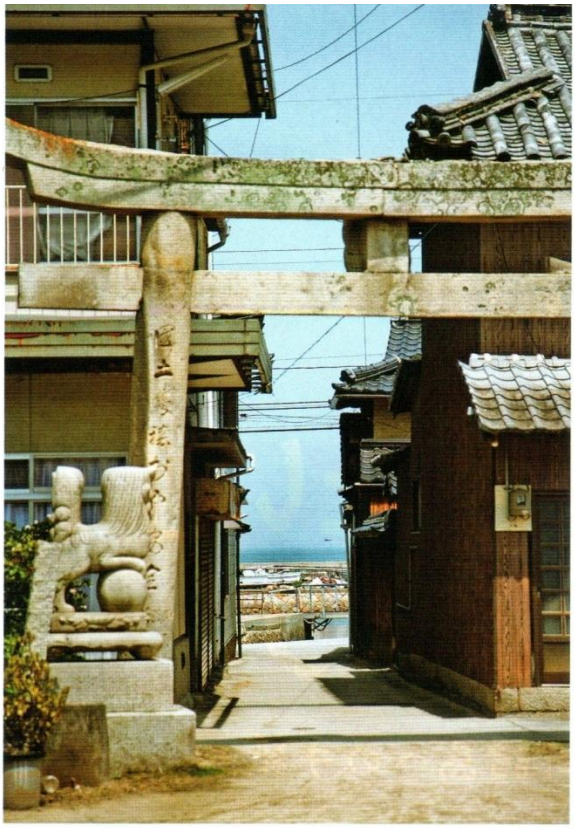
10年後、笠岡諸島に暮らすあなたへ

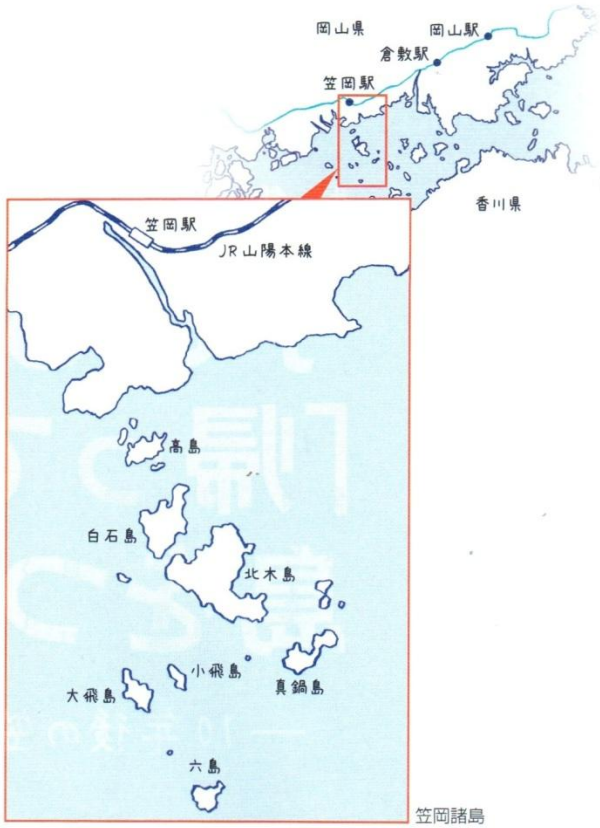
10年後の笠岡諸島には、変わらず美しい海と砂浜がありますか？

10年後、変わらずたくさんの魚はやってきていますか？
10年後、変わらず観光客のひとたちは来てくれていますか？
10年後、変わらずお祭や踊りは受け継がれていますか？
10年後、変わらずお年寄りの元気な笑顔はありますか？
10年後、変わらず静かな夜はありますか？
10年後、私たちの母校はありますか？

10年後、私たちは、どうしたら笠岡諸島が楽しく、
素敵な島になるか考えました。

10年後、私たちが、笠岡諸島に帰ることができますように。


真鍋島の島内風景



笠岡諸島

人口減少と高齢化が顕著

岡山県笠岡諸島は、瀬戸内海のほぼ中央に位置しています。飛び石のように連なる7つの有人島（高島、白石島、北木島、大飛島、小飛島、真鍋島、六島）は、離島ならではの問題を抱えており、とりわけ、人口の減少と高齢化が顕著です。島には高校がないため、子どもたちは高校入学と同時に島を離れます。そのまま島外に就職し、島には戻らないケースもあり、高齢化率は50％（島によっては60％）を超えています。

まちづくりの始まり

島でのまちづくりが始まったのは1995年、笠岡市のまちづくり支援事業がきっかけでした。市民グループが実施を希望する事業に市が助成するもので、笠岡諸島を舞台とする企画が多く採用されました。

97年には北木島で7つの島から島民3000人がつどい、大運動会を実施しました（運動会は、その後も毎年開催）。運動会では「島からの主張」というユニークな競技があり、その中で島民から「島民のやる気はあるが、それぞれが仕事を持ちながらのまちづくり。さらに活動をすすめるためにも事務局としてサポートしてくれる職員が欲しい」と市長に要望が出されました。

「島民になれ」「イエスの対応あるのみ」

島民の願いを受け止めた市長は、市長特命の島おこし専門部隊「島おこし海援隊」を組織し、市の職員の中から志願者を募りました。論文と市長面談の結果、3人の職員を海援隊として島へ派遣。守屋さんもその一人でした。海援隊への市長からの命令はただひとつ、「島民になれ」。海援隊のメンバーはとにかく島民と接し、いっしょに汗を流して信頼関係を築くことに力を注ぎました。

「一番多かった要望は草刈り。当時は〝イエス〟の対応あるのみ、とにかく役に立ちたいという一心で、島の人との関係づくりに努力しました」と守屋さんは当時を振り返ります。

マスコミも注目

2002年には島民と行政が力を合わせ、任意団体「かさおか島づくり海社（以後、島海社）」を設立。「島海社」には、「笠岡諸島の島民全員が社員であるという願いが込められている」と守屋さんはいいます。島海社は、島それぞれの特徴を活かした組織づくりを大切にしながら、空屋対策事業や、島の食材をふんだんに使った弁当「島弁」開発などにとりくみ、マスコミに取り上げられるようになりました。

その後、島海社はNPO法人格を取得し、デイサービスなどもおこなうようになります。『やってみんとわかるまぁ』（思っていただけでは何も始まらない。やってみてダメだったらやめればいい。やる前にどうこういっても始まらない）。この精神が島海社の活動の原点です。

大人からは後ろ向きな発言

島おこし活動は、すべてが順調にすすんでいたわけではありません。7つの島を結ぶ島海社があるものの、それぞれの島意識は依然として強く残っていました。同じ船に乗り合わせても、違う島の人だと挨拶もしないということもあったようです。折しも、島おこし活動が次へのステップを模索していた時期でした。「島民がまちづくりに少し疲れたのかもしれんのう」と守屋さん。

そんな時に、守屋さんと山崎さんが出会います。山崎さんのグループは、笠岡諸島に住む大人42人に島の現状について聞き取りを実施。「みんなが一丸となってできるものがない」「諸島で連携ができない」「子どもがいないので活力が低下している」など、大人たちからは後ろ向きの発言ばかりが聞かれました。

「子ども島づくり会議」が始まった

「それじゃあ、子どもが帰ってきたいと思える島をつくろう」。未来へ向けての想いを語る場として「子ども島づくり会議（以下、会議）」を開催することになりました。

会議には、中学生から高校生まで13人の子どもが参加。5回にわたる会議を開催して、島の現状と将来について

守屋基範さん

真鍋島の港

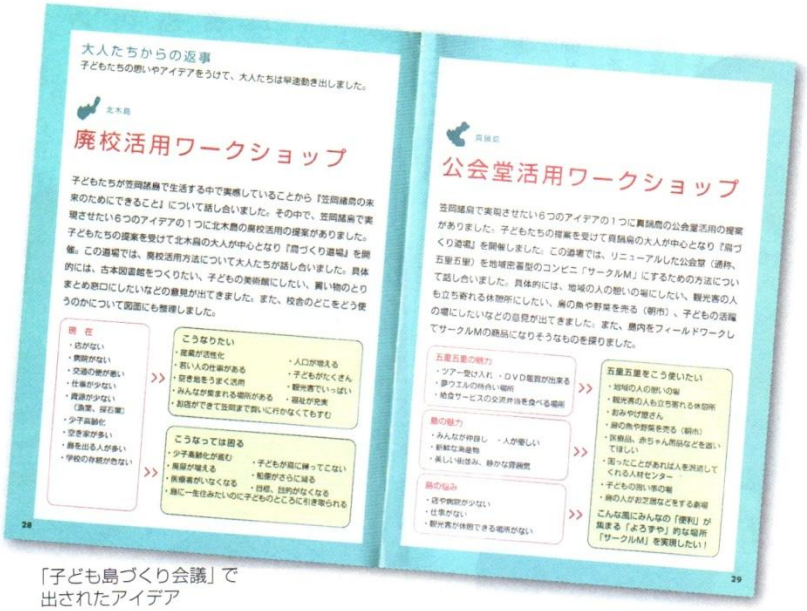
語り合いました。その中で、次のような楽しいアイデアが出されました。

子どもたちは、自分たちのアイデアを寸劇にして、大人たちにわかりやすく、具体的にアピールしました。

森本洋子さん（NPO法人かさおか島づくり海社副理事長）は、子どもたちの発表を聞いた一人です。「私たちの島づくり活動は、自分たちの子どもが成長した時に帰ってきたいと思える島づくりからスタートしました。ですから、子どものアイデアや意見は率直にうれしかったですね。子どもの視点は、私たち大人と全然違いました。子どもたちは、10年後、20年後に自分が帰ってきたいと思えるような島にしたい、というところから出発しているので率直な意見が出せる。大人は島の現状や周りの兼ね合いも考えますので、アイデアがあっても口に出せないことがあります。ここに風穴をあけてくれた、そんな気がしますね」。

大人が動き出した

子どもたちのアイデアや提案を聞いた大人たちは、早速動き出しました。ちょうどその頃、真鍋島にあった公会堂の建物がリニューアルされました。大人たちは公会堂（通称、五里五里（ごりごり））を子どもから提案された地域密着型コンビニ「サークルM」にするための話し合いを重ねました。欲しい物が何でも揃うコンビニエンスストアは実現しませんでしたが、公会堂を地域の人の憩いの場にしたい、観光客も立ち寄れる休憩所にしたい、島の魚や野菜を売る朝市をやりたい、子どもの活躍の場にしたい、などの意見が出され、少しずつ形にしていきました。


大人たちからの返事
子どもたちの思いやアイデアをうけて、大人たちは早速動き出しました。

北木島
廃校活用ワークショップ

子どもたちが笠岡諸島で生活する中で実感していることから『笠岡諸島の未来のためにできること』について話し合いました。その中で、笠岡諸島で実現させたい6つのアイデアの1つに北木島の廃校活用の提案がありました。子どもたちの提案を受けて北木島の大人が中心となり『島づくり道場』を開催。この道場では、廃校活用方法について大人たちが話し合いました。具体的には、古本図書館をつくりたい、子どもの美術館にしたい、買い物のとりまとめ窓口にしたいなどの意見が出てきました。また、校舎のどこをどう使うのかについて図面にも整理しました。

現在
・広がない
・病院がない
・交通の便が悪い
・仕事が少ない
・資源が少ない（農業、採石業）
・少子高齢化
・空き家が多い
・島を出る人が多い
・学校の存続が危ない

こうなりたい
・産業が活性化
・若い人の仕事がある
・安き始をうまく活用
・みんなが集まれる場所がある
・お店ができて笠岡まで買いに行かなくてもすむ
・人口が増える
・子どもがたくさん
・観光客でいっぱい
・宿泊が安来

こうなっては困る
・少子高齢化が進む
・風呂が増える
・医療費がいなくなる
・島に一生住みたいのに子どものところに引き取られる
・子どもが島に帰ってこない
・船便がさらに減る
・日程、目的がなくなる

28

貞鍋島
公会堂活用ワークショップ

笠岡諸島で実現させたい6つのアイデアの1つに貞鍋島の公会堂活用の提案がありました。子どもたちの提案を受けて貞鍋島の大人が中心となり『島づくり道場』を開催しました。この道場では、リニューアルした公会堂（通称、五里五里）を地域密着型のコンビニ「サークルM」にするための方法について話し合いました。具体的には、地域の人の憩いの場にしたい、観光客の人も立ち寄れる休憩所にしたい、島の魚や野菜を売る（朝市）、子どもの活躍の場にしたいなどの意見が出てきました。また、島内をフィールドワークしてサークルMの商品になりそうなものを探りました。

五里五里の魅力
・ツアー受け入れ、・DVD販売が出来る
・夢ウエルの時使い場所
・地金サービスの交流が当を食べる場所

五里五里をこう使いたい
・地域の人の憩いの場
・観光客の人も立ち寄れる休憩所
・お茶やけ屋さん
・島の魚や野菜を売る（朝市）
・医療品、赤ちゃん用品などを置いてほしい
・困ったことがあれば人を派遣してくれる人材センター
・子どもの憩い場の場
・島の人がお芝居などをする劇場

島の魅力
・みんなが仲良し　・人が優しい
・新鮮な海産物
・美しい街並み、静かな雰囲気

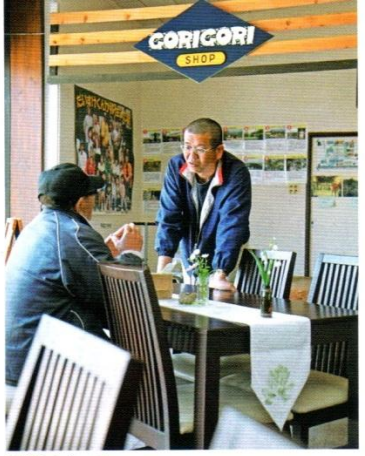
島の悩み
・近や病院が少ない
・仕事がない
・観光客が休憩できる場所がない

こんな風にみんなの「便利」が集まる「よろずや」的な場所「サークルM」を実現したい！

29

「子ども島づくり会議」で出されたアイデア

森本洋子さん



喫茶スペース

特産物の販売

「五里五里」の外観

文屋雅子さん

生まれたつながり

公会堂「五里五里」がある真鍋島は、本州笠岡から五里（およそ17㎞）、四国香川の多度津からも五里の地にあります。本州と四国からそれぞれ五里離れているので五里五里。ここには島の人や観光客が気軽に訪れる喫茶スペースがあり、島の特産物が販売されています。

五里五里で働く文屋（ぶんや）雅子さん（NPO法人かさおか島づくり海社・真鍋島集落支援員）は、笠岡近郊の町から10年9月、島に移住しました。島に来る前は病院で介護職やケアマネジャーの仕事をしていました。「病院で働いていた時は夜勤も多かったし、仕事と子ども中心の生活でした。子どもは玄関先から車に乗って習い事に行く。家族以外の人とあまり会うこともなく、つながりもない生活でした」。島に移住するきっかけは、子どもが学校に行き渋るようになったことでした。島には高校がないので、子どもが高校に行くまでの期限付き移住です。

「今は、どこへ行くにしても島のお年寄りに会い『あんた、どこ行くん？』と声をかけられる。地域の方も子どもによく声をかけてくれます。子どもはうれしく感じているようで、以前よりも学校に行くようになりました。大げさかもしれませんが、島の人々を通して人生の再生をさせてもらっています」

子どもたちの提案がなければ、文屋さんの人生はまた違ったものになっていたかもしれません。

「場をつくることで、そこに集う人のつながりが生まれます。子どものアイデアを形にする作業を通じて、島の大人が人のつながりの大切さを改めて認識したんだと思います。みんなが集う場をつくって利用することで、新たなつながりが生まれます。『やってみんとわかるまぁ』です」。島でのまちづくりに15年かかわってきた守屋さんの説得力のある言葉です。